

『日曜日の青年』における変身と魂の移動

増田 悦子

ジュール・シュペルヴィエルの晩年の作品である『日曜日の青年』⁽¹⁾。我々はこの作品を変身を抜きにして語ることができない。日曜日の青年こと「私」が愛するオブリガチオン、そして彼女を巡る人々。その周りを語り手である「私」が変身しながら巡り巡る。あるときは蠅の体で、あるときは猫の体で。そしてついにはオブリガチオンの身体の中に入り込み、再び自分の身体を見出すときまで、彼は変身の旅を続ける。青年はグリーンという通り「変身の主役」⁽²⁾であり、この作品はオブリガチオンの妹が愛読している輪廻転生についての本に象徴されるように、「変身を巡る輪廻の輪、その輪が閉じる時、自分を再発見する旅」⁽³⁾なのである。

しかしながら、この変身談を、特に第1部、第2部の変身談を追っていくと、そこに思い掛けない小説の効果を見出す。それはこの作品における「私」の変身を単なる変身にせず、「私」が語る世界の可能性を広げるものなのだ。それはいかなるものなのか。この論考では、作品の第1部、第2部を特に取り上げ、『日曜日の青年』に見られる変身を追ってみたい。

<魂と肉体の分離>

この作品の主人公であるフィリップ・シャルル・アペステグは、詩を書いている法律科の学生⁽⁴⁾で、毎週日曜日に彼を昼食に招いてくれる代議士の美しい妻オブリガチオンに恋をしている。ある日、代議士が昼食に遅れた時に、彼はオブリガチオンに愛撫を求めるが、激しく拒絶され部屋を追いだされてしま

う。彼は混乱した頭で部屋の外に立ち尽くす。その時最初の変身が起こる。

「部屋を追い出され、謝罪の言葉も見つからず、混乱しながら僕は心の奥底で少なくとも完全にはこの部屋を立ち去りたくないと思っていた。すると、僕の人的外見、帽子やコートが階段の中に消え去り、僕の考える、（そして夢見る）核心はそのまま許しを乞うための言葉を虚しく探していた。この存在を暴露しないように気を遣い、僕の物思う核心は前の日曜に見た悪夢に全力でしがみつきの、悪夢をよみがえらせ、そこに隠れ家を見つけた。

フィルムが鍵穴に鍵を差し込んだ瞬間、僕は客間の鏡に映った1匹の蠅の形をした自分を見た。」⁽⁵⁾

この蠅の変身で興味深いのは、変身に先駆けて、まずシャルルの人的外見が消えてなくなり、後に彼の物思う核心（noyau）が残されているところである。まず人的外見、帽子やコートが舞台から消え、身体は核心を残したまま消滅してしまう。そして「物思う核心」が後に残り、その後、気が付くと⁽⁶⁾彼は蠅になっている。これはシャルルの人的肉体的変形といえるだろうか。変身が起きたときすでに彼の人的外見は消滅している。しかもシャルルはこの蠅のことを「隠れ家」と呼んでいる。隠れ家と呼ぶ限りにおいてそれは詩人にとって自分の体ではなく、あくまで逃げ場所ではない。⁽⁷⁾この蠅への変身において動いているのは「物思う核心」なのである。この変身は肉体的変形ではなく、肉体と分離した魂の、隠れ家への移動なのだ。

「核心」の移動は、次に起る猫への変身にも見られる。

蠅の体から開放され、人間に立ち戻ったシャルルは、以前のように日曜にオブリガチオンの家を訪れるようになる。彼は二度と変身をしたくないと心に堅く思っているが、ある日、家に入ってきた野良猫に引掻かれた瞬間、またもや人間の形が崩れてしまうように感じ、猫に変身してしまう。彼は、弾ける変身の萌芽（germes）を押さえようとする耐え難い苦痛にとらえられるのを感じ、そ

して自分の亡霊が階段を下りていく間に、彼の最上のもの（le meilleur de moi）、彼の生きている深部（ma vivante profondeur）は、客間の、猫の体⁽⁸⁾の中で意識を失ってしまうのだ。⁽⁹⁾

流れはますます形の変形から、魂の移行という方向に向かっている。この変身の場面で表現されている彼の「最上のもの、生きている深部」は、蠅の変身における「僕の物思う核心」であることはいまでもない。その「最上のもの」が猫の中に入り込んでしまうということはつまり、この「猫への変身」もまたシャルル自身の身体が変形するものではない。主人公の核心の移行なのである。

このように次々と起こる魂の移動であるが、移動しているというその感覚は次なる変身でシャルル自身にもはっきりと意識されるようになる。

第1部「日曜日の青年」の後半部分、シャルルが猫に変身していた時に、代議士は、妻に買った毛皮のコートの代金支払いのために追い詰められ、自殺してしまう。次に意識を取り戻したときには、⁽¹⁰⁾ シャルルはフィルマンの棺の後ろにいた。そして、夫の死後、オブリガチオンは母国に帰ることを決心する。彼女の帰国の日が来て、シャルルは心ならずも⁽¹¹⁾ パリのオルセー駅から彼女を送り出すことになるが、そのとき新たな変身が起こるのだ。

「その時僕は不幸にも《僕は彼女と離れない。彼女と一緒に行くのだ。》

と思った。そして駅長が笛を鳴らした瞬間、僕は自分の身体がホームに残って旅立つ彼女と妹に手をふり続けているのを感じていたけれど、同時に僕の真の魂、僕の深部がオブリガチオンの身体の中に移り住んだのを感じた。」⁽¹²⁾

肉体と魂が切り離されたところで第1部は終わりを告げる。この変身もまた、肉体と魂の核心との分離に始まる、「物思う自分」の移動という形態がとられている。蠅の変身における「物思う核心」、猫の時の「最上のもの」がこの変身では「真の奥底の魂」（âme véritable et profonde）という語で表され、しかもその魂の動きが「移り住む」（émigrer）や「入る」（entrer）⁽¹³⁾ といっ

た動詞で表現され、変化するのではなく移動するのだという概念がより前面に押し出されている。そしてその移動の概念は、シャルルの自覚をも伴っているのである。

これまで我々は『日曜日の青年』の変身の形態について考察してきたわけであるが、その変身とは形の変形によるものではなく、魂と肉体の分離によるものであった。シャルルの肉体は消え、あるいは遠く離れてしまうが、しかし魂は消えうせない。魂が消えうせてしまっは語り手である「私」が消滅してしまう。それはこの小説の終わりを意味する。では「私」が他の体に移ったとき「私」と体との関係はどのように保たれているのか。次に乗り移った肉体と「私」との関係について考えてみたい。

<乗り移った体との関係>

シャルルは蠅の体を「隠れ家」として見ていた。その意識は猫の変身においてさらに強められている。彼は自分のことを「猫の借家人」と呼び、「自分とは全く違う存在と一体化するのがこんなにも簡単だとは思ってもみなかった」⁽¹⁴⁾と告白する。

「僕は猫の借家人のようなものだったが、我々の共有するこの住居の用益権は失われていなかった。つまり、少なくとも僕の法学書ではこう説明しただろう。我々一人ひとりには固有の意識と思考を持っていたが、全体を統率していたのは僕だと。」⁽¹⁵⁾

借家という表現は、隠れ家という表現よりも「借り物」の意識が濃い。猫を自分の借家であると感じるということは、その体が自分のものではないという自覚の現れなのである。体を動かす思考の全体の統率権はシャルルにあるが、いずれもが固有の意識を持ちあわせている。詩人の、猫の、その固有の思考は混ざることなく二本の柱となり、一つの体の中に存在している。シャルルの深

部の最上のものは、外見は猫として空間を移動し、内面は人間として詩人としての視点で世界に接しているのである。実際、彼の精神の自由は保たれており、その頃に彼は詩を作ったりしている。⁽¹⁶⁾

第2部「・・・そしてその後日談」に入ると、シャルルと「借家」との分離は、彼自身がそれとはっきり分かるほどになる。オブリガチオンの身体の中に忍び込んだシャルルは、始め、自分が愛しい女の美しい顔やまろい腕になってしまったのではという不安に捕われるが、すぐにそれは間違いだったと気づく。

「僕は彼女の中で消えうせやしないかと脅えたが、すぐに自分を取り戻した。確かにその女性の身体に住み着いてはいたが、いわば亡霊のようなもので、肉体から切り離されているのがはっきりとわかった。」⁽¹⁷⁾

肉体から切り離されているとはどういう状態なのか。それは人知れず彼女の傍に居て、彼女を見守っている傍観者の立場と何ら変わらない。亡霊のように彼女の肉体に宿っている彼には、蠅や猫の時のように、宿主の肉体を自由に動かす権利すらない。ものを見るのも、オブリガチオンの瞳を通してでしかなしえないのである。まして、彼女の思考の中への侵入はほとんどなされていない。シャルルはオブリガチオンの行動と台詞を追うことに終始し、彼女の思っていることは最小限しか語っていない。相変わらずオブリガチオンの彼に対する気持ちも明らかにならないまま残されている。

その後、シャルルは彼女の身体から小人の医学博士の身体に移るが、その変身後の在り方は、オブリガチオンの身体を住み処としていたときとほとんど変わらない。小人の肉体はやはり彼にとって「借り物の肌」⁽¹⁸⁾であり、シャルルには身体の統率権はない。呼び掛けてみても宿主には聞こえず、ただ亡霊のように張り付く存在なのである。

この借り物の体とシャルルの魂との分離は、蠅とシャルルの生死にも影響を及ぼしている。変身はあくまでも借り物の身体への移動であり、その隠れ家が

死に至ろうとも「僕の物思う核心」は死にはしない。実際、シャルルが逃げ込んだ蠅の体は、彼の愛するオブリガチオンの手によってたたき伏せられ殺される。蠅としてのシャルルの最後の言葉は「ああ、オブリガチオン！君が僕をサングダルで殺した朝までの僕の自己犠牲の数々が分かるだろうか・・・。」⁽¹⁹⁾で結ばれている。蠅は殺された。しかし中にいたシャルルの核心は死にはしない。ただ隠れ家が壊されただけのことなのである。結果としてシャルルは蠅の体から解放され、人間の身体に立ち戻っている。

猫の変身では、彼はますます自分がその借り物の体から切り離されていることを感じ始める。彼が入り込んだ猫は怪我をしていて、最初はなんだか彼のものでない痛みを感じるような気がするのだが、実際は、彼を嘔んだのはオブリガチオン達の視線だけで肉体的苦痛は全く感じなかった、⁽²⁰⁾と語っている。

このように「私」と借り物の肉体との関係は、言うなれば一つの肉体の中に二本の魂の柱、お互いの意識は干渉せずお互いが混ざり合うこともない空間の共有、そういった分かれた関係である。その分離は「私」の精神の自由を実現し、シャルルは己を保ち続け、物語は詩人の観点で、詩人の言葉で綴られることになるのである。

これまでアペステグの蠅、猫、オブリガチオン、小人への変身において、その変身の形態を追ってきたわけであるが、その変身は魂の移動という形をとって起きていた。分かれた魂は借り物の肉体に次々に乗り移っていくが、そのとき詩人の「物思う核心」はいつも借家とは切り離され、精神的自由はいつも保たれていた。『日曜日の青年』に見られる変身は己の肉体が変化する変身ではなく魂の移動だった。つまりその変身の形態は、オヴィディウスの『変身物語』、カフカの『変身』、イオネスコの『犀』に見られるような変身ではない。シュペルヴィエルはこの変身をどう捉えていたのだろうか。

<変身を巡る輪>

この『日曜日の青年』における魂の移動は、己の肉体の変形を変身とするな

らば、変身ではないといえる。しかしながら、シャルルが蠅の姿になったオブリガチオンの家は「変身(métamorphose)の現場」と呼ばれ、⁽²¹⁾ 猫の体に移ったときの描写にも「変身」の単語が使われている。シュペルヴィエルの中では「変身」として位置づけられているのだ。その一方で、我々はシュペルヴィエルがこの変身をもう一つの面から捉えているのを見出すことができる。

蠅に変身する前の日曜日に、シャルルは代議士の家でうたた寝をして蠅になった夢を見た。その話をすると代議士は「輪廻説の本に肘をついて眠っていたせいで」と笑う。⁽²²⁾ そして実際蠅になったとき、シャルルはその本に読み耽っているドロレスの手に止まって「お手本を示してやっているのに僕の存在にさえ気づかない」⁽²³⁾ と考えるのである。この本に何が書かれているかは明らかにされていない。しかし、この本はこの『日曜日の青年』の変身を象徴的に表しているように思われる。

生と死を巡る輪。シュペルヴィエルは『日曜日の青年』の変身を輪廻転生の輪の中に投げ入れようとしている。だが、この変身は、魂が宿っている肉体の死によって魂が肉体から解放され、新たな肉体を探すというものとは異なっているのである。⁽²⁴⁾

第1部の終わり、オブリガチオンの出発に始まる変身は、その後、同船していた医学博士の身体を経て、シャルルが再び元の身体に巡り合うところで解決する。博士の身体を離れて辺りを漂っていた彼は、ある一軒のホテルに抗し難い力で引き寄せられる。そこには魂と離れ離れになっていた彼の肉体が横たわっていた。そして彼は無事に自分の肉体と再会を果たし、自分の身体に戻る。

このように、オブリガチオンの出発に端を発するこの変身では、変身後のシャルルの肉体の存在が明らかにされている。肉体が語る言葉によって、魂を抜き取られた身体はオルセー駅の階段を苦勞して登り、その後数ヶ月間床につき、周りの者は心配し・・・⁽²⁵⁾ と対外的にもその存在は裏付けられている。

シャルルの肉体は彼の魂が離れた後も存在しているのだから、『日曜日の青年』における変身は、肉体が滅んでから始まる魂の移り行きとは少しずれがあ

る。だがなお、我々はシュペルヴィエルがこの変身の中で、生と死を巡る輪を描き出そうとするのを見るのである。

蠅の変身において、蠅がオブリガチオンの手でたたき伏せられ殺されることによって、シャルルは蠅の体から解放される。一方、猫の変身においても、彼が変身を解かれたのは、フィルマンの死の銃声によってであり、第2部でもシャルルがオブリガチオンの体を離れたのは、彼女の妊娠、つまり乗り移った身体に新しい生を見出したショックからである。この変身には実に巧みに生と死が入り交じっている。シャルルは変身を通して生と死を巡る輪の中にいる。だがなぜ、シュペルヴィエルはあえてこのような変身の形態をとったのだろうか。そこには何か深い意義が隠されているのではないか。

<周囲の視線からの脱出>

人間の姿形が変形するメタモルフォーズ、しかもその変身が予期せぬ、望まぬ変身だった場合、変身した側の驚愕、戸惑い、悲しみといった感情は、その変身の事実を知らされる側にも同様に起こる。巨大な虫に変わってしまった息子のグレーゴルを見たときの家族の驚き、⁽²⁶⁾ 目の前にいる雌牛が自分の娘だと知ったときのイナコスの河神の嘆き、⁽²⁷⁾ 自分の知り合いが次々に犀になっていくときのベランジェのやり切れなさ。⁽²⁸⁾ 変身の物語は変身者の周囲の人々をも巻き込んで展開する。しかしながら、この展開の形式には大前提がある。それは変身者の周囲の人々が、変身した後にもその人が誰であるかを分かっている、あるいは信じているということである。『変身物語』の「イオ」の中では、雌牛の姿に変えられた後も親やユピテル、ユノー神にとっては「イオ」であり、作品中もその名前と呼ばれている。グレーゴルの虫への変身においてもそれは同様で、変身後も相変わらず彼は家族からグレーゴルと呼ばれ、グレーゴルとして存在する。「これがグレーゴルである」という周囲の認識は変身後も変身後も変化しない。だからこそ周りの人々は戸惑い、悲しむのだ。

この周囲の認識の仕方は『日曜日の青年』の場合とは明らかに異なっている。

シャルルが蠅に変身したとき、猫に変身したとき、周りの人々はそれを知らない。オブリガチオンは蠅の姿のシャルルを追い払い、猫の姿の彼に向かって「彼女を熱愛する可哀相な人」について話している⁽²⁹⁾ ことからわかるように、変身は人知れず起きている。後にシャルルがオブリガチオンの身体に取り付いたときも、彼女は何も知らない。彼は「隠れ家」にいる。シャルルとしての存在は周囲の目から隠されているのである。それはシャルルに注がれる視線からの脱出であり、シャルルとしての「私」に一つの自由を与えるものののだ。

この変身後の周囲の認識の有無は、この『日曜日の青年』の変身談を進めるにあたって、重要な役割を果たしている。ではその役割とは一体何なのか。

<「私」を取り巻く円からの脱出>

カフカが「自分は<私が>を<彼は>に置換え得たときから文学に入った」⁽³⁰⁾と語るように、『変身』は三人称で書かれている。『変身物語』は神話の時代の物語で「私」のような語り手はいない。『犀』も語り手のいない劇作品である。それに反して、シュペルヴィエルの『日曜日の青年』は「私」によって語られ、「私」が見て、聞いて感じたことによって描かれている。その世界の中心は、あくまでも語り手である「私」である。シャルルが彼自身の肉体にいて、外界に接しているとき、我々は人間の「私」の目を通して世界を見ることになる。その語りによって我々は始め、シャルルの想いがオブリガチオンに少しでも届いているかのように感じ、小説の展開を期待する。しかしながら、その時我々は、彼が接する世界や周囲の人間模様を、人間としての「シャルル」に向けられる周囲の反応や対応を受け止めながら見ているにすぎない。我々は、人間としてのシャルルに割り当てられた世界の枠の中にいるのである。⁽³¹⁾ 当然、周囲の人達とシャルルとの間には、接していない時の空間的・時間的隔たりがあるし、人間の彼と接しているときには見せない一面もある。それを垣間見るためにはシャルルがしたように姿を隠して見る必要がある。

「彼女の外出を待って、僕はこっそり彼女の後をつけていたり、時には向いの喫茶店から彼女を盗み見たりした。彼女の家で彼女の傍に居ることを拒むものは何もないのに、はっきりいって僕のこの行動は変だった。でも僕は姿を見られず、話し掛ける必要もなく、彼女を驚かせる⁽³²⁾のが好きだった。」⁽³³⁾

自分には見せない他人の一面を垣間見るためには、隠れ見る必要がある。これが「私」の見る世界の限界である。だが、この「自分の姿を見られないで、彼女に話し掛ける必要もない」という状況を可能にしているのが変身なのだ。

変身が起こる前には、「私」という中心を取り巻く世界の円がある。それがシャルルの見聞可能な範囲であり、また我々に呈示される世界の枠組みでもある。しかし、他方で「オブリガチオン」という中心を取り巻く円が存在している。その円の重なりあうところが、彼らの接している時空間であるとすれば、それ以上の接点を望むならば、「私」は自分に割り当てられた世界の円を超えて、彼女の円の中に入らねばならない。しかもそれには、「人間としてのシャルル」という中心を持つ円を、「オブリガチオン」を中心とする円に重ね合わせればよいというわけではない。ただシャルルとして、四六時中行動を共にしても、やはり依然としてシャルルには見せないオブリガチオンの一面は残るのである。ならば、どうすればよいのだろうか。彼の姿を現わすことなく、彼女に気取られることなく彼女の円との新たな接点を作るためには、シャルルとしての肉体を捨て去り、「物思う自分」だけ新たな円の中に滑り込ませ、彼女の円との違う接点を生み出すこと、さらには、魂だけをすっぱりと彼女の円の中に収めてしまうことが必要だったのである。

魂の移動は、いわば、人間としてのシャルルを縁取る世界を抜けだして、他の存在の世界の円、つまり蠅や猫の持つ世界の円の中に入り込むことなのだ。蠅や猫になることで、シャルルは、人知れずオブリガチオンの私生活を垣間み、夫婦の営みやフィルマンの独白を見聞する。さらに彼は、パリに引き留めることが出来なかったオブリガチオンに取り付くことによって、本来ならば離れ離

れになって知ることができない彼女の生活を追っている。⁽³⁴⁾ しかも彼が好む「自分の姿を見られない、話し掛ける必要もない」状態でオブリガチオンの傍に居ることができるのだ。この状況は、語り手である「私」に、人間としてのシャルルにはいわば隠された部分、見えない世界の出来事を語ることができる。シャルルの変身と共に、我々は新たな世界の円の中に移動している。ある時は蠅の世界。ある時は猫の世界の円。世界は変身を通して広がりを見せる。

しかしながら、これまで述べてきた状況は、魂の移動による変身だけでなく、変形による変身においても可能であるということができる。蠅の、猫の変身を形の変形の変身に置き換えることもできるのだ。だが、なぜここではあえて魂の移動という形がとられているのだろうか。それはつまり、この変身がすべて、オブリガチオンに恋い焦がれる青年の想いに集結しているという点にある。彼の変身の恩恵は、愛するオブリガチオンを「隠れ見る」ことができるということなのだ。蠅の、猫の変身、いわゆる変形による変身によっても同様に表現できるであろうこれらの変身が、実際そうであったならば、シャルルは蠅として死なねばならない。そしてその蠅の死は、すなわちこの変身談の語り手の死であり、小説の終わりを意味する。仮に、自らの死によって蠅の体から解放されたとしても、シャルルは蠅を叩いたオブリガチオンの目の前で変身を解かれ、その存在を露呈することになるのである。そのことは猫の変身においても同様のことがいえる。⁽³⁵⁾ しかしながら、このように姿を露呈して自らの存在を明らかにすることは、その変身の恩恵を、オブリガチオンを隠れ見ることにしていたシャルルには、不本意なものなのだ。恋する青年に必要とされる変身は、その変身の事実を周囲に明らかにせず、人知れずシャルルを取り巻いている円から出て戻ること。それが、魂の移動による変身なのである。

そして恋する青年は、変身によって新たな世界の円を描きながら、背後にある世界に触れていく。それは同時に、我々に新たな世界を開くことでもある。我々は「私」と共に、本来はシャルルが語ることのない世界に足を踏み入れる。変身が作り出す状況は、我々を「私」が語る一人称の世界に置きながら、同時

に三人称の広がりを見せる世界へと誘うのである。

これまで我々が考察してきた『日曜日の青年』における変身は、形の変形ではなく、魂の移動による変身だった。その切り離された魂は、人間としてのシャルルが持つ限られた存在の枠を越え、新たに別の領域に滑り込む。それは、我々にとっても新たな領域への旅立ちなのだ。この変身の業を通して、我々はシャルルと共に、人知れず複数の存在の持つ円を旅することができるのである。世界は開かれている。変身の向こうに。

注

- (1) Jules Supervielle , *Le Jeune homme du dimanche et des autres jours* , Gallimard, 1955
- (2) Tatiana.W.Greene, *Jules Supervielle* , Droz-Minard, 1958, p222
- (3) *ibid.* p.227
- (4) Etienneble はこのシャルルをシュペルヴィエルの複身としている。Etienneble, *Jules Supervielle*, Gallimard, 1960, p.47
- (5) *Le Jeune homme du dimanche*, pp.21-22
- (6) ギイ・ベルザーヌは「現代のメタモルフォーズ（ネルヴァル、ユーゴー、モーパッサン、ロートレアモン、カフカ、ミショウ、イオネスコ、．．）において、変身の瞬間は、消失、それから完全な消滅に近づいている。」と指摘している。Guy Belzane, *La métamorphose*, Editions Quintette, 1990, p.5
- (7) A Serge Montingny qui lui demandait un jour pourquoi chez lui tant de métamorphoses: " Parce que l'on parle toujours d'évasion et que ce mot est galvaudé. (19.mai 1955) Réponse évasive, car évasion n'est point métamorphose. " Etienneble, p.47
- (8) ここに、作者は "dans la personne du chat" という表現を使用している。
- (9) *Le Jeune homme du dimanche*, pp.38-39
- (10) 蠅、猫の変身から解かれたいずれの場合もシャルルは「気が付くと」(se retrouver) 人間に戻っており、変身の現場から移動している。 *ibid.* p.28, p.49
- (11) 『日曜日の青年』の紹介文中で T.W.Greene もEtienneble も「シャルルは思いきって求婚しかねている」といった表現を使用しているが、シャルルは「いつの日か彼女に結婚を申し込み、立派に夫の役割を果たすことができる」と思っているだけで実際の行動は起こしていない。T.W.Greene, p.228 Etienneble, p.120

- (12) *Le Jeune homme du dimanche*, pp.56-57
- (13) *ibid.* p.57
- (14) *ibid.* p.40
- (15) *ibid.* p.40
- (16) *ibid.* pp.41-42
- (17) *ibid.* p.61
- (18) *ibid.* p.116
- (19) *ibid.* p.28
- (20) *ibid.* p.39
- (21) *ibid.* p.31
- (22) *ibid.* p.19
- (23) *ibid.* p.24
- (24) « De même que l'homme qui habitent une maison a soin de la conserver et d'en réparer les endroits faibles, ainsi l'âme, logée dans le corps, s'étudie à en réparer les forces. Le séjour devient-il inhabitable, l'âme s'en échappe pour en chercher un autre. » « Ainsi, l'âme mène le corps et lui fait faire de longs voyages, (...) mais quand ce corps vient à périr, elle l'abandonne comme la carcasse d'un vieux navire pour en chercher un autre qu'elle puisse gouverner comme le premier. » *Le Grand Dictionnaire Universel du XIXe siècle*, de Pierre Larousse, 1865, Tome 11, p.145
- (25) *Le Jeune homme du dimanche*, p.122
- (26) カフカ『変身』
- (27) オヴィディウス『変身物語』
- (28) イオネスコ『犀』
- (29) *Le Jeune homme du dimanche*, p.43
- (30) Maurice Blanchot, *Espace Littéraire*, Gallimard (folio essais), 1955, p.21
- (31) それはブランショが如く、我々は限界付けられた存在であり、前を見れば後ろが見えず、ここに居るときにはあそこには居られないという理由に因るものなのだ。
(*ibid.* pp.170-171) 故に外界は「私」に全て集約し、私の死角、私のいないところの出来事は実況中継的に語ることができない。それが「私」の語る世界の限界なのである。
- (32) シャルルがどのようにオブリガチオンを驚かせたのかは書かれていない。
- (33) *Le Jeune homme du dimanche*, p.54
- (34) シャルルの身体はフランスに在りながら魂は南米に在り。シャルルは同時に二つの場所に存在しているのである。それはシュペルヴィエルの、彼が同時に至る所に在りという思い、空間にも心と思考の様々な領域にもまた自分が同時に在りという感情によって現れる靈感 (Jules Supervielle, *Naissances suivi de En songeant à un art poétique*, Gallimard, 1951, p.63) の一つの表現のようにも思える。
- (35) フィルマンが自殺した瞬間、猫の姿のシャルルはオブリガチオンの傍にいた。